

ミニ

特集

イネカメムシの発生と防除の現状

近年問題となっているイネカメムシの現状と防除対策

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
中日本農業研究センターいし
じま
石 島ちから
力

はじめに

イネカメムシ *Niphe elongata* (Dallas) は、成虫の体長が 12~13 mm の比較的大型の斑点米カメムシ類 (図-1) で、1950 年代までは斑点米被害を引き起こすイネの主要な害虫として知られていた (樋口, 2019)。しかし、イネ栽培の全面的な早期化や化学合成殺虫剤の普及など (高井ら, 1976) により、それ以降の国内における本種の発生量は減少し、一部地域では絶滅寸前まで激減した。しかし、2010 年以降、茨城県、三重県、滋賀県、京都府、山口県などをはじめ各地で次々と発生量や発生地点の増加・拡大が報告され、2010 年代後半には収量が大幅に減少するなどの被害事例が認められるようになった。2023 年には福島県で 42 年ぶりに本種の発生が認められ、農林水産省による都道府県の聞き取り結果によると、2024 年には 37 都府県で発生が確認されている (農林水産省, 2025)。このように、本種は近年関東・東海・近畿・中国・四国・九州地域の都府県などで急激に発生

量の増加や分布の拡大が認められており、多発生地域では大きな被害をもたらしている状況にある。

本種の発生や被害が増加した原因の一つとして、担い手不足などから生じた農業経営体の規模拡大や新規需要米の増加による作期の分散・長期化があげられる。これによって、発生盛期である 7~8 月に、水田内に良好な餌となる出穂直後のイネが連続的に存在し、増殖に好適な状況になっていると考えられる。実際、筆者らが 2018~19 年に調査を行った茨城県南部地域の現地圃場一帯でも、早植えから遅植えまでのイネが栽培され、それらの地域では 7 月中旬から 8 月下旬にはどこかの圃場で出穂している水田が存在しており、本種にとって良好な状況になっていた (石島ら, 2020)。また、温暖化により高温傾向になっていることも要因の一つと考えられている。本種の発育適温はほかの害虫よりもやや高く、28℃ 付近で発育速度が高まり、羽化率も高くなることが判明している (八塚ら, 2023)。さらに、ほかの害虫と同様に、暖冬傾向によって越冬死亡率が低下し、越冬個体数も増



図-1 イネカメムシ幼虫 (左) および成虫 (右) (左図提供: 農研機構植物防疫研究部門 平江雅宏氏)

Current Status and Control of *Niphe elongata* (Dallas) in Recent Years. By Chikara ISHIJIMA

(キーワード: イネカメムシ, 不稔, 斑点米, 防除対策)